



はじめに

本号は二〇二一年度の修了生による特別号となっています。

まずはじめに、「研究室での経験が都市に対する立ち位置に与えた影響、またそれを今後どのように活かしていきたいか」について、また「自分に影響を与えた都市空間」について修了生ひとりずつ思いを語ってくれました。

続いて、そんな修了生にとって都市デザイン研究室はどんな場所だったのか、ひとことと写真の双方で想いを寄せてもらっています。

最後は、二年間に渡ってマガジンの発行を担当してきたマガジン編集部による座談会となっています。各人が思い入れのある号や、編集部の後輩への期待が語られています。

修了生にとって都市デザイン研究室とは何だったのか、編集部員にとってマガジンとは何だったのか、是非ご一読ください。

Vol.317 March 31st, 2022

研究室への置き手紙

河崎 篤史

Atsushi KAWASAKI



私が都市デザイン研究室を選んだのは何より「最も現場に近い」という理由だ。学部時代は地域に関わることなく机上で学んだわずかな知識でなんとか乗り切るので精一杯な学生だったが、都市デザイン研究室に入り、宇治と上野という二つの地域に実際に入り手を動かしていく中で、理論的に学んだことに現実味が肉付いていき、都市デザインが本当に面白く、これを生業にしていきたいとようやく実

感した二年間であった。その歳月を経て感じることは「地域の中で自分は何者なのか？」ということだ。プロジェクトでは学生という立場で第三者的に地域に関わることも基本だが、しかし自分と地域との距離感というのは地域によって全く異なってくる。上野では「地元大学の学生」だし、宇治では「ヨソモノ」であるように。業務になった途端、施主・設計者・施工者という明確な関係性が絶対な

この業界において、そうした曖昧で多重人格的な地域への関与というのは、難しくもアカデミアならではの魅力だと思う。最後に。この二年間、多重人格的第三者として地域に関わることはあっても、一人称の私が「自分ごと」として本気になれるまちはまだ出会えていないのが正直なところ。これから地域を見る目を養いながら、そうした「自分ごと」にできるまちに巡り会うことを心から楽しみにしたいと思う。

都市デザイン研究室での生活の中で、相対化に相対化を重ねるような思考が癖付いたように思う。一見望ましい都市の動態に対しても、敢えて一歩引き、風致・公正・環境・風俗、様々な立場から現象を批判的に捉える姿勢というものを知った。恥ずかしながら、都市工に入るまで、世の中には絶対的な解があると錯覚していた私にとっては、価値観を百八十度矯正させられるような時間だった。



齊藤 領亮

Ryosuke SAITO

一方でそれは同時に、（おそらく都市工民の多くが陥った経験のある）虚無主義との戦いの始まりも意味していた。自由を絵に書いたようなこの研究室の中で、自分の興味関心のままにいろんなことをやらせてもらったが、それでも、スタジオやPJ、修論で手詰まり感がでたとき、「自分がこの街に介入する意味は何なのだろうか？」と、自分の行為そのものに懐疑的な視点を持たざるを得ないことも

多々あった。それは都市工学という分野そのものの意義が大きな転換点を迎えているしるしでもあるのかも知れない。私は就職を機に、都市からは少し距離を置いてみることを選択した。私はそれを、都市デザインというものを改めて相対化する良い機会だと思っている。十年後、二十年後の自分が何を考えているかについては皆目見当がつかないが、いつか自分らしい形で再び都市に関わることでできていたらと思う。

谷本 実有

Miyu TANIMOTO



私はランドスケープアーキテクトとしてどこでも自然の移ろいを感じられる都市空間をつくるという目標を持っています。学部では造園を専攻していましたが都市の仕組みも知りたいという思いで都市工に進学しました。都市デザイン研究室での二年間は想像していたよりも刺激的で大きな影響を受けました。手賀沼プロジェクトでは、社会実験による実証を踏まえて提案することや現地の方々

と一つのことをつくり上げるという経験をしました。宇治プロジェクトではまちづくりの詳細に分析してまちづくりのヴィジョンを提示することから、具体的な敷地のデザインをするまでの一連のプロセスを経験することができました。これらを通じて設計者としての場所にふさわしい空間をデザインするための力が養われたのではないかと思います。また、多くを学んだのは研究室メンバーとの対話です。

議論の進め方から表現力、まとめる力などあらゆる面で尊敬が尽きません。そんなみなさんに囲まれての二年間は本当に貴重であったと感じます。四月からは夢だったランドスケープ設計の仕事に就きます。都市デザイン研究室で得たことに自信を持って、多くの人と対話しながら場所の良さを引き出せる設計者として都市に関われるよう頑張りたいと思います。

鈴木 直輝

Naoki SUZUKI



構えや技法を習得することができた。地域に根差した空間やそこでの暮らしは一朝一夕にできるものではなく、ひとつひとつ丁寧に紡いでいくことが求められる。地域と真摯に向き合い、文脈を読み解き、住民や関係者と膝を突き合わせ、先生方やプロジェクトメンバーと昼夜議論し、現地に赴いて額に汗して調査や活動に取り組み、遠投力を持ってまちの未来像を描き、ブックレッ

トなどのアウトプットを生み出す。プロジェクトでの経験が風景を丁寧に紡いでいくための大きな糧となっている。就職して都市空間のハードやソフトの実装に関わることを通じ、「地域の風景を丁寧に紡いでいく」ためのより幅広い知識や経験を積み重ねたい。加えて、これまでのプロジェクトのフィールドにも足を運び、実践し、地域とともに歩んでいきたい。研究室で培ったことを基盤として研鑽に励むことにしよう。



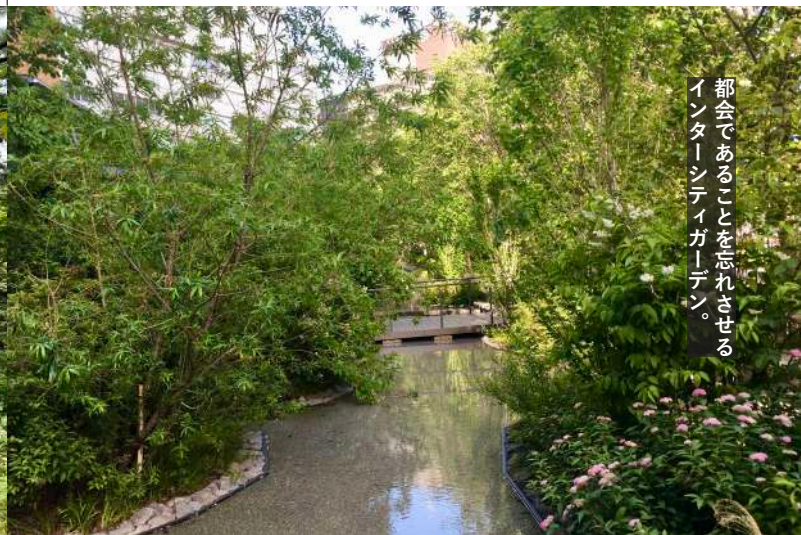
図書館と隣接広場が時間軸の中でゆるやかに重なる応酬。
(杉並区立中央図書館)



サンシティの公開空地
暮らしと不可分なみどり。



丁寧に風景を紡いでいくことを
教えてくれた私の原点。
(石川県加賀市萬松園)



都会であることを忘れさせる
インターシティガーデン。

松坂 大和

Yamato MATSUZAKA



研究や読書を通じ都市を表現する上での語彙を獲得し、プロジェクトやコンペを通じてデザイナーとしての基礎的な経験を積むこと。都市工ないしデザインに進んだ当初の目的はその二点にあった。前者は道半ば、後者に関しては諦めてしまった。

修了研究ではムスリム墓地をめくり異なる立場のアクターにヒアリングを行い、多くの方にお世話になった。ときに不審視されたり、ヒアリン

グ内容の掲載を断られたりするなど、研究という営為の加害性を再認識した。活動の目的が万人に対し満足してもらうことではないなか、協力していたいたくためにどのような誠実さを示すべきか再考する機会となった。

プロジェクトにおいては消化不良感が強かった。とりわけ高島平では地域住民と対話を通じてニーズを把握し、形にする実践ができなかったことに悔いが残る。そもそも



藤本 一輝

Kazuki FUJIMOTO

様々なまちに触れるなかで、個性の異なるまちを「事例」として捉え、必死に課題を探すようになってしまった。粗探しが多く根底としてのまちへの愛が欠如していた。

ファーストキャリアではコンサルタントとなる。都市とどのように関わるかは未知数である。別れと出会いが数多い職種であるが、対象への愛と誠実さを持ち、表現することを心誓いたい。

植田 啓太

Keita UEDA



都市デザイン研究室での経験といえばプロジェクトだ。しかし私は始めからPJへの参加を希望していたわけではなく、偶然PJ報告会へ参加したからであった。しかしこの決断が、都市への向き合い方を大きく変えた。宇治PJでは今まで自分が考えたことのない、道路骨格の変遷や地蔵の位置などを丁寧に調べた。最初はよくわからずただ調べていたが、これをした後の宇治散歩は実に面白いものとなっ

岡本 亮太

Ryota OKAMOTO



修士課程の前半を地域デザイン研究室、後半を都市デザイン研究室で過ごしたわけですが、その二年間を通じて、都市・地域の中で自らが暮らす場所をより良いものにしようと活動されている方々に出会う機会が何度もありました。彼らの生み出す空間や風景は、必ずしも格好良く洗練されたものではないかもしれないけれど、そこで誰かの「やりたいこと」が実現していることこそが、都市・地域の中

で大切にするべきことなのではないか、と私は考えるようになり、私は都市に対する立ち位置として、そういう人々を支えられるような空間、制度、あるいは活動基盤を作ることに関わりたいと思うようになりました。しかしその後、そうした行為はたいいていの場合、誰かの人生を変えることに繋がるのに、責任を取ることはできないということに気付かされました。そういう無責任な立場で外から口を出し

てくる人が嫌いだ、という声を聞くこともありました。成功だけではなく失敗することもあるし、好かれることだけではなく嫌われることもあるという、それを引き受ける覚悟を持たなければならぬ、ということなのではないかと思えます。その中で自分ができる最大限のことは、せめて自分は納得できるように、その時その場で向き合っている都市・地域に、真剣に全力で向き合うということではないかと思えます。

大きなビジョンを描くことと小さなアクションを積み重ねることを両輪でやっていくという経験と、学問的知識以上に都市の見方やそれ以前の都市に向かう態度が曲がりなりにも身についたことがこの二年間の大きな財産であったと思います。特にプロジェクト活動において、外からやってきた（しかも多くが二、三年で去っていく）人間がその都市と向き合う際、将来の道筋を立てていくために実際に

街を歩いて人々と関わり何かやってみるという段階が重要だと、身を持って感じることでできました。先生方や同期のように思想やコンセプトを図面やパースに表現する能力の不足を常々感じていた自分でも、表現の手前の構想やフットワーク軽くアクションを起こすことで都市デザインを実践できるかもしれない。それがデベロッパー業界を選んだ大きな理由の一つとなりました。

とはいえデベロッパー業界も大型の開発によって一気に地域を変える手法に収益を頼っているのが現状で、一方で都市づくりに限らずgoodな製品・サービス開発がトレンドになっている中、近年活発になってきた道路占用などの社会実験に代表される小さなアクションを丁寧に積み重ねていきながら、理想の都市とそれを持続可能にするための収益化を実現していきたいです。





岡山 紘明

Hiroaki OKAYAMA

現在、愛媛県の内子町の過疎化が著しい小田地区でまちづくりを志しています。きっかけは研究室のプロジェクトでした。デザ研がなければ名前も知らない土地でした。小田地区は都市というより田舎です。二十一世紀は都市の集中、田舎の過疎が停滞化し、逆転していく流れだと感じています。都市の未来を描くと同時に、理想的な田舎を追い求めることは非常に重要なことだと思えます。人生をかけ

てやってみたいことはアーバンデザインならぬルーラルデザインを極めることです。田舎は都市よりも環境問題や第一次産業との関わりも深く、分野も物理的な面積も広大かもしれません。その分やりがいもあります。地域の個性やその土地を読み解く力、その視点はデザ研で学んだこともあります。しかし、デザ研はきっかけであり、経験は研究室を出てからのほうがたくさんあります。僕にとって大学

院は学びやきっかけを掴んで、良い経験が積めるような環境に身を置くための準備期間でした。都市デザイン研究室には本当にたくさん甘えさせてもらいました。恩返しとして僕にできることは、学生の皆さんに気づきや学びがあるような活動を先輩としてすることです。もし愛媛に来たら、おもてなししたいなと思いますので、ぜひ、お声がけください笑！

都市デザイン研究室で過ごした日々を経て、今の自分にとって大切な考え方が二つあります。①自分で価値があると思うものは、自分で責任を持つて主張する必要があるということです。都市デザインという行為、計画的な視座は超然主義的な一面を持ちながら、実際の都市空間の主役は生活者であり、意思決定で成り立っています。万人にとって良いものはなく、tangible/intangibleなものに

園部 達理

Tatsuri SONOBE



関わらずただ継承すべきと主張するのは傲慢であり、相應のコミットメントが必要であることに気づかせていただきました。②上記に通じるもので、地域を表現する際にも、何を切り取るか、どう文脈をつなぐかという「編集」行為がいかに効果的かということ です。どのようなストーリーが付与されるかで、人にとっての価値は変わってくる一方で、表面的なマーケティングや観光のツールとして不本意

な形で利用されないよう肝に銘じておきたいと思っています。今後もし引き続き都市と真摯に向き合う姿勢は崩さないように努めつつ、最初のキャリアとして①の点から、キャッシュフローや経済合理性という実務的なレベルでも十分通用できるように、修論でも扱ったような公立文化施設の PPP/PFI のアドバイザー業務の道に進みたいと思います。現場でお会いすることになりましたら、皆様何卒よろしくお願い致します。



陳 瑾瑜

Jinyu CHEN

日本の都市はあらゆるものを包み込む力を持っています。中国美術学院出身の私が都市デザイン研究室の皆様と一緒に勉強できるということがそれを表しています。美大での教育を受け、私は結果を優先してプロセスを完成させるという習慣が身につきました。そのプロセスに違和感を感じながらも、結果が良ければそれで良いと考えていました。デザ研に入って、この考え方は都市との接し方と共に

変わりました。これまでの自分は本当のデザイナーとして都市と接していないこと、そして、トップダウンの考え方はいろんな重要なものを無視することになるということに気付きました。二年半の留学の間、都市工での授業、研究室のプロジェクトなどに参加して、先生方と他の研究室メンバーからいろんなことを学ばせていただきました。デザイナーだけでなく、観察者、都市の仲間と

して都市生活に参加する重要性を改めて認識しました。それだけではなく、以前と違う視点から物事を考えることを教えて頂き、研究室の皆さんには感謝の気持ちしかありません。また、プロセスの中で、モノや人の力を発揮することは面白くて意義深いことであると思い始め、今後はこの気持ちを保ちながら、中国のまちづくりの仕事に参加したいと今は思っています。これも二年半前の私には想像もできなかったことでしょう。

I joined Urban Design Laboratory in April 2021. When I introduced my research topic in my first lab meeting, all the professors gave much helpful suggestion and comments. With the help of professors, my research made progress gradually. Then, in the next stage of my research, the significance of the research was the most asked question and the one that was always on my mind. I've been looking for answers until now. I think this question will also come up again and again in my subsequent research. Thinking about this question and trying to find an answer, in my opinion, is an important part of doing research. It's not easy, but it's very interesting. Maybe a few years from now, I will have a different idea than I do now.



崔 帥玲

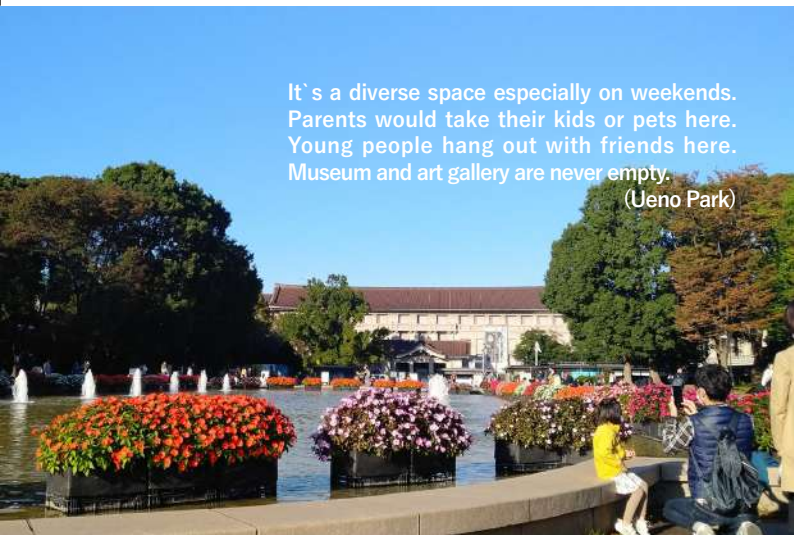
Shuailing CUI

In my master research, the research topic shifted from sustainable tourism to suburban development and transition. In discussions with teachers, I gradually realized the awkward situation that suburbs are. Most time, they cannot completely decide their own development direction, but are strongly influenced by their “mother city”. Isn't it meaningful and interesting to focus on how the suburbs are affected by their “mother city”? Thus, my current research topic was born.

Although the research during the master period was not that deep, and the results did not make me proud and satisfied, I was very excited and motivated when I realized that all my research was valuable.

In April 2021, I also decided to pursue a Ph.D. and continue to do research, although at that time, I did not have a detailed plan for how to do research and how to make my research more valuable. But I felt fortunate, especially when the theme of the master dissertation became clear, and I told myself that maybe it would be good to keep going down this path.

I am very grateful to the professors and laboratory members for their help in my research this year, which made me more confident to continue my research. BTW, it was an unforgettable memory of out graduation trip. I decided to get a driver's license and travel by car one day.



様々な異なる人を
集めているところ
(陳)



地域とひたむきに
向き合わせてくれた場所
(岡本)

各々が心地よいと感じる
都市空間をしっかりと
持った人達の集まり
(園部)

いつもそこにある
(これからもそんな
存在でいて欲しい)
(松坂)



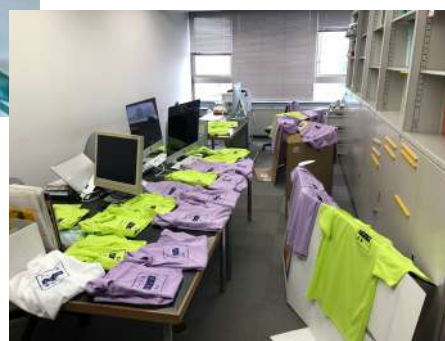
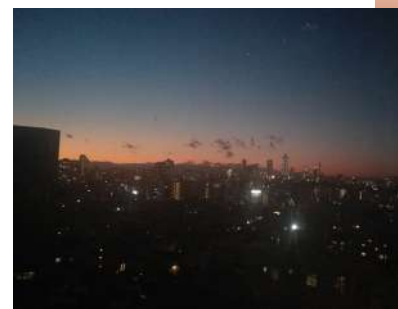
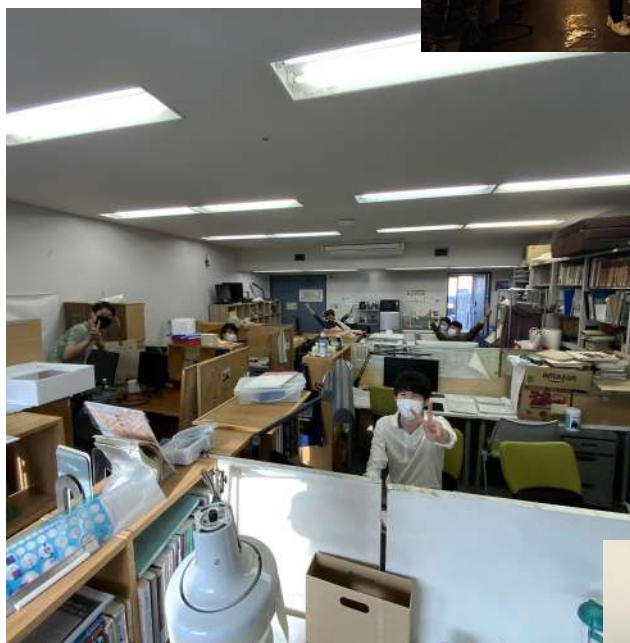
好き放題に
都市を探究させて
もらえる場所
(齊藤)



都市を愛する者
たちの集い
(鈴木)

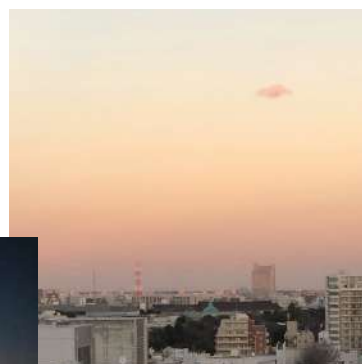


A watchtower
in the beautiful urban.
(CUI)



まちづくりに興味を持つ
きっかけと学びを得られる場所
(岡山)

護送船団
(藤本)



大所帯で、賑やかで、忙しい
(植田)

これからも
思い出し続ける場所
(谷本)

常に自分を衝き動かし
続けてくれる存在
(河崎)

あなたにとっての都市デザイン研究室
をひとことで！

No.	yy.mm		No.	yy.mm	
297	20.09	研究の道を辿って	309	21.08	出で湯のふるさとから
298	20.10	轍のかたち	310	21.09	衆力功をなす
299	20.11	都市の遊歩者	311	21.10	設計者と言葉
300	20.12	Staggered Moments of Urban Planning in Three Countries	312	21.11	都市のエディター
305	21.04	個即全	313	21.12	都市を巡る「旅」
307	21.06	自ら駆け抜ける	315	22.02	その叙情に
308	21.07	都市の審美眼			

本座談会で話題に上がったアーカイブ

先生へのインタビュー
→ 博論輪読会

“思想”をたどる

主体・運営から
研究室PJを特集

単発企画

連続企画

いて書きたいなということとで使わせてもらった。都市デザイン研究室では自主性が大事にされているけど、研究室プロジェクト以外に自発的に地域に入って活動したり、自分たちでチームを組んで設計コンペに申し込んだりする人も多い。そういった姿勢を今後も大切にしていきたいと思った。コンペで勝つための考え方やテクニク、思考プロセスが蓄積されたのもよかった。

松坂 vol.298(2020.10)の博論を特集した企画では、先人が何を残したか意識した。当時はあまり本格的な研究ができていなかった時期でもあり、中島先生から良質な博論

を読むようアドバイスをいただいた。危機感があつた中、手がかりを得たくて、同期を巻き込んだ。自分はこの回で読んだ博論や文献が修論に活かしたので、みんなの研究のスタートになれたならよかった。

鈴木 その回は自分が担当したvol.297(2020.09)と連続したテーマで深められた。「ただ話を聞いて終わり」が反省点だったマガジンから、この二回で自分たちがそれを思考し発信していく号に昇華することができた。

松坂 前の号をふまえて次の号を組み立てる試みは有効かもね。

二年間で思い入れのある号

河崎 二〇二一年度は「思想を伝える」ことを大きなテーマに掲げて企画を考えただけでみんなの思い入れのある号はどれ？

陳 編集部に参加するまでは内容より見た目を重視する癖があつたので、ほかのメンバーから企画の立て方について学んだ。vol.300(2020.12)



の留学生OB座談会が個人的な進歩だったのかな。あと河崎さんの担当したvol.308(2021.07)は特に好きです。

河崎 よかった(笑)この号は前月から動いて綿密に計画を練った。マガジンを口実に、パブリックトイレから都市の公共性を考えるという、普段とつづきにくいテーマにフォーカスできたのが良かった。外に出たり集まったりする機会が取れていなかった中で、特定のテーマに沿って街歩きすることも楽しかった。マガジンをうまく使えた。

松坂 何回かマガジンを機会に街歩きすることがあったよね。

藤本 担当したvol.299(2020.11)では二十三区東側(南千住・白髭・京島・月島)、vol.305(2021.04)では大谷幸夫先生の作品(文教スポーツセンター・河原町団地)と、両方ともマガジンを利用して街歩き企画を立てた。特にvol.305では新年度一発目ということで「思想」を意図的に盛り込みたいと思い、

大谷先生という先人の思想を辿ることに決めた。寄稿や街歩きには編集部もそうでないメンバーも巻き込むことができ楽しかった。今年は研究室メンバー皆がマガジンに積極的に関わってくれたのではないかな。

鈴木 vol.307(2021.6)では、自分が石川県・加賀でやっている活動につ



月島から隅田川越しに夕日を眺む (@vol.299 街歩き)

反省と学びから見える

マガジンの意義と役割

陳 座談会などでみんなの意見をまとめることが難しかった。留学生に関連するテーマを扱うことが多かったが、それぞれ出身なども異なり、共通する話題を見つけるのが難しいと感じた。

そういう意味でホームページのマガジンのページもバックナンバーを参照できるようにするとかもう少し見やすくなると良いよね。

藤本 マガジンを拡散して、色んな人に届ける方策について、SNSでの投稿は継続してできていたが、情報量の割に多くの人にリーチできておらずもったいないと思う。マガジンに対する意見や批判などのフィードバックを収集できれば、さらにマガジンの質の向上に繋がられる。

河崎 今年の代は思想を伝えるということに重きを置いていた分、自己満足になりがちで、それに対するレスポンスまで実は気を遣えていなかった。さつき月をまたいでテーマを連続させる話が出たけど、前月のマガジンで学生が考えたことをベースに先生方やOBの方にお話を伺うことのようなこともできそう。コロナの影響もある



今年度は表紙からこだわった

が、積極的にデザ研外部の先生方にインタビューするような企画もやりたかった。一度、西村先生にお話を伺うような企画案も上がっていたよね。

松坂 「型から外れる」みたいなところにまだ至れなかった。トイレの号からの「M」の文字で遊ぶ」とか、手書きの文字を入れるとか、テンプレートから離れてオリジナル

リティを出すということを知れたし、自分でも今後挑戦してみたい。あと対談や寄稿でかなりの蓄積がアーカイブにあるが、研究やプロジェクトを進める中でそれらを都度読み返すような機会をとればよかった。自分が担当した回ですら意外と忘れている（笑）

鈴木 二〇二一年の十月からミーティングの回数を二回に増やすことで、レイアウトやデザイン面が良くなったと感じた。その一方で、企画内容に深みが出るわけではなく、勉強会、関連資料の読み込み、街歩き、座談会などの議論する時間がマガジンにおいては大事だと感じた。アウトプッ

トについてはまだまだできていないけれども、マガジン編集部に参加して幅広い物事について共有できたのはよかった。

河崎 今年は平均的にページ数多めで、寄稿や座談会の開催など負担が多めだった。

松坂 コロナの影響もあって対面の企画が立てにくかったのはあるよね。

鈴木 今年は五人体制になったことで、実質的に主担当になれる回数が減り、一回一回に思い入れがある。あと対面の機会がないぶんマガジンを通して交流するというようなマガジンの役割も見えてきた。

後輩たちへの期待

藤本 渡邊くんはプロジェクトやコンペなど都市とさまざまな関わり方をしている。その経験を生かして都市の知られざる見方、個人的な地域への思いを記事にして研究室に啓蒙してほしい。一人称的な視点が欲しいよね。

河崎 いつもはいい意味で力が抜けてるのに記事は真面目。関心ごとや自分の軸がしっかりあるような気がするのでもっと押し出してほしい。

松坂 期待だね。**合田くん**は Vol.310 (2021.9) では Vol.309 で自分が扱

ったテーマを深掘りしてくれたのが嬉しかった。けど論点の立て方に苦戦していたね。あと「これだ」と思うテーマがあると視野が狭まってしまう印象。広い視野を持ってほしい。

鈴木 着眼点・発想・こだわりはおもしろいので、それを丁寧に磨いて昇華させてほしいな。

藤本 杉本さんの都市のタイポロジーの企画 Vol.312(2021.11)では、都市のディテールを観察し、独自の観点から類型化していて、緻密で学現学的。図が多い回では言

葉が少なくなる分、短文やフレーズで持ち前のセンスを発揮することで、さらに高い次元へと引き上げられそう。

陳 見ていて楽しい記事でしたね。

松坂 ミーティングでもよくコメントしていて、物怖じしない感じがいいよね。

藤本 神谷さんの担当した Vol.313 (2021.12) は共有型のテーマ。ふだん覗き見ることでない他人の思考の一端に触れられるようだった。研究室旅行という共通体験がなかったからこそ「旅行回」に価値が生まれる。

河崎 クオリティが高くて、ぱっと見だけでも楽しい雰囲気が素敵だね。**若松くん**は群を抜いて主張がはっきりしていて軸がぶれない。ミーティング中も企画内容・デザイン含めて的確なコメントをして議論を回していた。

藤本 彼が担当した Vol.311 (2021.10) は「思想を伝える」という今年度のテーマを踏まえると思えば抜けている。自分が担当した号でやってみたかったけど達成できなかったことの発展形としてやってもらったのが嬉しかった。読みながらひとり快哉を叫んだ。

陳 Vol.311 で協働したが、記事の内容からデザインまで細かいところまで考え抜かれていた。Vol.315 (2022.02) でも渡邊くんと二人体制で記事を作っていたのがよかった。マガジン編集部は主担当と副担当が分かれているけど、マガジンを作り上げていくプロセスは、単独ではなくて協働していくようなやりかたもあるのではないか。

藤本 主担当・副担当の棲み分けはもっと柔軟にしてもいいかもね。

河崎 M1のみんなを振り返ると、ほんとにそれぞれ個性的だね。一方で、一緒に議論したりっていうのが少ないような



第17代都市デザイン研究室マガジン編集部メンバー

編集長の

編集後記

二〇二一年二月号、修論・卒論を特集した記事を見て、ある先輩がツイッターでこう呟いていました。「研究室のマガジンを読んで泣きそうになっている、みんなすごい」と。私はこれを見て非常に感銘を受けました。自分たちもこんな誰かの心を動かす記事を書きたい。二〇二一年度都市デザイン研究室マガジンではその思いを達成することはできたでしょうか。先日ささやかながら開催していただいた研究室追いコンにて、中島先生が「研究室はいつでも・だれでも戻ってこれる『ふるさと』なのだ」とおっしゃっていました。研究室マガジンは研究室内部での近況報告・情報交換的な役割がはじまりだと聞いていますが、今やそれは現役生にとどまらない、OBOG からまだ見ぬ将来のデザ研生まで、研究室の過去から未来への時間的なふくらみをもった場となっています。

次期編集長も研究室に入る以前からの研究室マガジンの一読者だったそうです。これからもこの研究室マガジンが「ふるさと」を思い出したり、足を運んだりする道標となることを期待しています。

第十七代編集長

河崎篤史

挿絵

陳瑾瑜・河崎篤史

デザイン監修

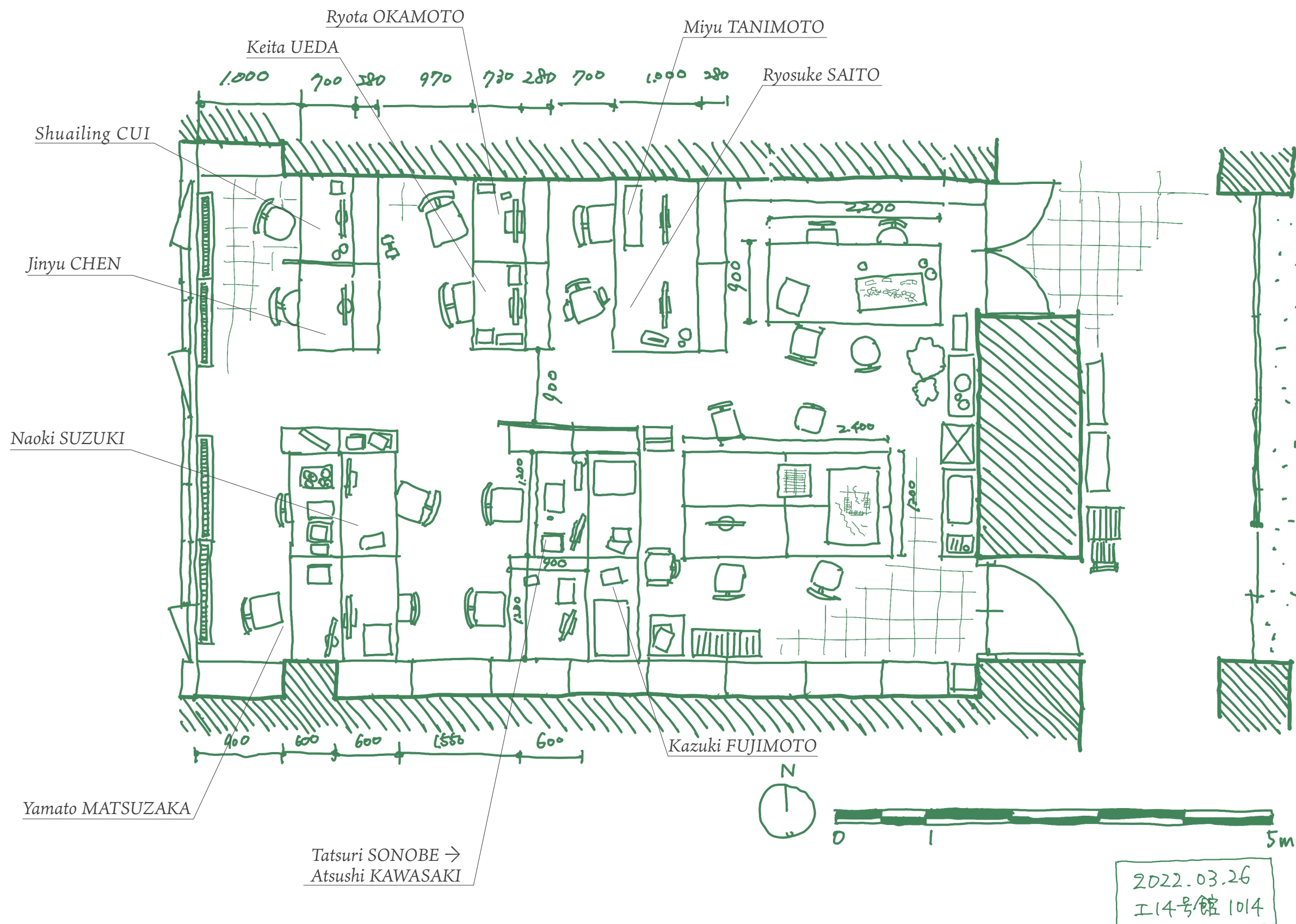
陳瑾瑜

編集

河崎篤史・鈴木直輝・藤本一輝・松坂大和・陳瑾瑜

発行

二〇二二年三月三十一日
都市デザイン研究室マガジン編集部





URBANDESIGN
LABORATORY